

伝統工芸技術の記録と保存

— 江戸時代後期の「葛布地道中着」に

用いられた素材の復元を事例として —

深津裕子

はじめに

農耕を始めた人々が植物の蔓を編んだ籠や道具、貯蔵や運搬に用いる器などを考え出し生活を豊かにした時代の先端技術には「土器の製作」や「織物技術」、すなわち工芸技術が挙げられるだろう。樹皮や植物の蔓から繊維を抽出する技を身につけ、撚りを与える、編む、結ぶことから始まり、後に道具を駆使した織物が開発された。葛、藤、科、楮などの植物はこのような日本人の原始的な工芸技術に密接に関わっていた素材で、福岡県太宰府市菖蒲浦古墳群第一号墳から出土した方格規矩鏡⁽¹⁾に付着した葛布は、古墳時代前期の織物技術を物語る。葛布はその後庶民の衣類、生活用品、漁網などに用いられた他、奈良・平安時代には貴族階級の喪服や蹴鞠用の指貫、江戸時代には武家の袴、袴、直垂、陣羽織、火消装束や道中着に仕立てられた。そして明治時代には雨衣地、袴地、襖地などに、昭和時代には色紙掛け、和装小物、甚平、襖地、壁紙地、カーテン、すだれなどに活用された。しかし現在、葛布の製作技術を継承しているのは、静岡県掛川市の掛川手織葛布組合に登録された3軒^{(2)、(3)、(4)} 島田市の一軒⁽⁵⁾の織元で着尺地、帯地、手拭い、和装小物などが製作されている⁽⁶⁾。

筆者は伝統工芸技術の記録と保存において、葛布の製作技術を事例として原始的な工芸技術が今日に至った変遷過程を辿るために、2007年4月より静岡県で現状調査を始め、時代を遡りながら研究を進めてきた。九州地方の葛布製作については『佐志の葛布⁽⁷⁾』、『西日本織物の民俗誌⁽⁸⁾』に1970年代頃の詳しい記録が残されていた。唐津地方で1960年代頃まで継承された佐志葛布は、松尾鏡子氏が1970年代に復元し、居座り機は唐津市歴史民俗資料館に収蔵されていたが、製作技術はすでに消滅していた⁽⁹⁾。また鹿児島県甕島の葛布紡織習俗は1970年（昭和45）に選定無形民俗文化財に選定され、鹿児島県教育委員会が記録作成を実施し『無形の民俗文化財記録第26集紡織習俗II 島根県・鹿児島県⁽¹⁰⁾』に収録されていたが、こちらもすでに消滅していた⁽¹¹⁾。そして、静岡県の掛川を中心とした葛布製作に関する資料として知られる1970年（昭和45）の『葛苧製造の手引⁽¹²⁾』、1873年（明治5）の『教草第七葛布一覽⁽¹³⁾』、1815年（文化11）の『製葛録⁽¹⁴⁾』に記載された葛布製作法を整理し、現在から江戸時代後期までの製作技術の変遷を辿った。これらの研究結果は『無形文化遺産研究報告第2号⁽⁶⁾』に報告した。

2008年4月より静岡県島田市の葛布製作者の協力をもとに、江戸時代後期頃に製作された「葛布地道中着」に用いられた工芸技術の復元、記録調査、保存に取り組んできた。現時点で再現可能な製作技

術や素材を明記した上で、その技術を記録および保存すること、伝統工芸技術の保存と今後の活用のための取り組み方を検討することを目的として復元研究を行っている。本稿ではその研究成果の一部として「葛布地道中着」を構成する各素材と製作技法の特徴を分析し復元した結果と、伝統工芸技術の保存伝承と活用法に関する今後の課題について述べたい。

1. 作品資料

「葛布地道中着（図1）」は葛布地を道中着に仕立てたものである。これは個人が所蔵するもので所有者や伝来は明らかではないが、おそらく江戸時代後期頃に静岡県西部の遠州地方で製作された葛布を用いて仕立てられたものだろう。本作品は特に葛糸の劣化が激しく、折り畳まれていた箇所では葛糸がことごとく折れ、袖や身頃部分に裂けが生じていた。留め具の紐や筐縁なども経年劣化が進行していた。作品資料を安全に保管するためには今後適切な処置が示唆される。

2. 研究方法

2.1 作品資料の調査

「葛布地道中着」の特徴を服飾史、染織技法、科学分析の3つの側面から考察する。まず服飾史の観点から作品資料の構成要素、形態、材質、加飾技法の特徴を明らかにする。次に染織技法の観点から各種素材と技法を整理した上で、走査型電子顕微鏡（SEM）による繊維写真の撮影⁽¹⁵⁾、高速液体クロマトグラフィー・フォトダイオードアレイ検出法（HPLC-PDA）による染料分析⁽¹⁶⁾、試薬反応試験⁽¹⁷⁾による媒染剤の判定などを行う。これらの結果をもとに資料に用いられた素材と製作技法の特徴の詳細を推察し、作品を歴史的に位置づけると共に復元のための資料とする。

2.2 素材と製作技法の復元とその記録

身頃生地、留め具に用いられた素材と製作技法を再現し記録する。各素材に関連する技術保持者に協力を依頼する。和綿、綿糸、絹糸、麻糸など糸素材の製作者、葛布、絹織物、組紐、鞋の製作者らと共に作品資料の調査結果を検討し、復元すべき製作技術と素材の特徴を検討する。次に復元する素材と製作技法を選定した上で各技術者に製作を依頼する。各製作工程は記述、静止画、動画で記録する。

2.3 伝統工芸技術の保存伝承への取り組み

本研究を一事例とし、技術者側が抱える問題点や今後の課題、伝統工芸技術を保存伝承するための具体的な方法、伝統工芸技術の現代社会における活用法について検討する。

3. 作品資料の調査結果

「葛布地道中着」の構成と形態、材質、加飾技法と各種素材の調査を行った。

採寸結果を表1に、各部位に用いられた素材の調査結果を表2に、SEMで撮影した繊維のイメージを写真1～6に示す。

表1 葛布地道中着の寸法

名称	寸法	名称	寸法	名称	寸法
身丈	78.0 cm	前幅(上)	31.0 cm	衿下がり	19.5 cm
衿	63.5 cm	前幅(下)	31.4 cm	前衿下がり	0.8 cm
袖丈	54.0 cm	後幅	31.2 cm	まち幅(上)	1.8 cm
袖口	30.2 cm	衿幅	6.7 cm	まち幅(下)	3.5 cm
袖つけ	54.0 cm	前衿幅(上)	12.2 cm	留め具(蝙蝠)	3×2×0.5 cm
袖幅	31.8 cm	前衿幅(下)	14.8 cm	留め具下地裂1	8×8 cm (四分円)
袖まるみ	2.0 cm	前衿丈	60.2 cm	留め具下地裂2	5×5 cm (円)
肩幅(右)	32.3 cm	前衿丈(付)	61.0 cm	乳下がり	23.5 cm
肩幅(左)	31.0 cm	衿肩明	20.8 cm		

表2 葛布地道中着に用いられた素材の調査結果

部位	名称	技法	材質	色	染料・媒染剤	糸	織上密度
身頃生地	葛布	平組織	経糸：和綿 緯糸：葛	茶系黒 緑系黒	不明染料*・鉄 不明染料*・藍・鉄	S撚り単糸，手紡ぎ 無撚り，結び繋ぎ	14/cm 10/cm
衿生地 留め具下地裂	黒羅紗	平組織 起毛加工	経糸：毛 緯糸：毛	黒黒	不明染料 不明染料	S撚り単糸，紡績 S撚り単色，紡績	10/cm 10/cm
留め具笹縁	茶絹	平組織	経糸：絹 緯糸：絹	濃茶 濃茶	不明染料* 不明染料*	無撚り単糸 無撚り双糸	40/cm 16/cm
留め紐	青緑組紐	16条唐打	絹	青緑	藍・不明黄色染料	無撚り糸の引き揃え	—
留め具	蝙蝠型鞆	彫り抜き	黒水牛角	黒	—	—	—
縫い糸	麻糸	撚り糸	大麻	藍	藍	S撚り単糸2本のZ撚り	—

不明染料*はHPLC-PDA法による染料分析において同種のピークが検出されたため、同じ種類の染料と推察された。



写真1 「葛布地道中着」身頃生地の緯糸×100



写真2 「葛布地道中着」身頃生地の経糸×300



写真3 「葛布地道中着」衿生地の経糸×500



写真4 「葛布地道中着」留め具
笹縁の経糸×500



写真5 「葛布地道中着」留め具
笹縁の緯糸×500



写真6 「葛布地道中着」縫い糸
×500

3.1 構成と形態、材質、加飾技法

「葛布地道中着」は単で身頃、袖、衿、留め具からなる。材質は、身頃と前衿生地が黒葛布、衿生地が黒羅紗、留め具の下地裂が黒羅紗、紐が絹組紐、鞋が水牛角⁽¹⁸⁾、笹縁が濃茶絹織物、縫い糸が麻であった。そのほか衿と留め具の芯として和紙が用いられ、澱粉系糊で裏打ちされていた。黒色に染めた葛布を身頃に用いた軽量の服飾で、重量は約 400 g である。

表 1 に示す各採寸値から推定すると身頃生地に用いられた葛布の寸法は長さ約 650 cm、幅約 36 cm であった⁽¹⁹⁾。加飾は留め具に見られ、前衿の上部角に四分円型、衿元に円型の黒羅紗を下地裂とした上に組紐を留めている。鞋 2 組は蝙蝠型に彫り込み裏に紐穴があった。下地裂の縁には濃茶絹製笹縁が施されていた。

本資料の類例が「藍葛布地道中着⁽²⁰⁾」「淡茶葛布地道中着⁽²¹⁾」「藍葛布地道中着⁽²²⁾」「淡藍葛布地道中着⁽²³⁾」に見られ、同時代のものと考えられた。しかし本資料には、黒色に染めた葛布の色艶、留め具の加飾技法などにおいて格別に高い水準の細工が見られた。これは単に機能性を重視した既製品の道中着ではなく、所用者又は着用者の地位、財力、美意識を十分に反映して製作された作例と言え、上級武家あるいは富裕な町人のために製作されたものと考えられた。

3.2 身頃生地

身頃の生地は葛布である。甌島の葛布製衣類や佐志葛布に用いられた葛糸は、撚糸されていたが、静岡の葛布では、経糸に木綿や苧麻を、緯糸に撚りをかけない葛糸が用いられた。本資料は後者に類似していることから静岡県で製作されたものであろう。生地は染色されており、茶味と緑味を帯びた黒色で光沢が見られた。経糸の木綿糸が緯糸と交差した箇所には染料が浸透しておらず、茶色を呈することから後染めと考えられた。経年劣化した葛糸は飴色を呈するというが、この葛糸もその特徴を示し、折れ目の断面は飴色であった。葛糸の劣化が著しいことから染色工程で鉄媒染が行われた可能性が示唆され、試薬による反応試験を行ったところ鉄成分が検出された⁽²⁴⁾。表面の光沢は葛糸特有であるとともに、道中着という用途から考えて、糊、蠟、油脂などによる防水加工がなされていることが考えられた。劣化して欠落した葛糸断片を用い、澱粉反応試験を行ったところ反応が見られた。表面に糊を塗布し、砧打ち⁽²⁵⁾を行うことにより、布面に滑らかさと光沢をもたせたのであろう。

葛布の織物構造は平織で、経糸は1 cm 間に11本、緯糸は14越であった。織幅は、織耳が裁断されていることから断定は出来ないが、約37 cmと考えられた。色は茶褐色で、天然繊維の色、山桃の樹皮などのタンニン系の染料で染められた色、黄変した色のいずれかの可能性が考えられた。経糸はS方向に撚られた木綿手紡ぎの単糸で、糸の太さは20番手前後であった。繊維長は約1 cmの非常に短いことから国産の綿であると考えられた。緯糸は葛のフィラメントを結びつないで構成したもので幅は1 mm弱であった。経糸は扁平なりボン状の繊維が捻転している繊維の側面形状が木綿繊維の特徴と、緯糸は扁平でまっすぐな側面形状が葛繊維の特徴と一致した(写真1、2)。HPLC-PDAによる染料分析を行った結果、藍と不明染料の重ね染めと考えられた。不明染料はタンニン系の茶色を呈する染料と考えられたが特定できなかった⁽²⁶⁾。

3.3 衿生地

衿生地の表面は毛並みが揃い光沢があり滑らかである。これは表面に起毛加工が施された毛織物であった。織物構造は平織で、糸は紡毛の単糸で、経糸、緯糸ともにS撚りであった。経糸は1 cm 間に約10本、緯糸は約10越であった。繊維には毛特有のクリンプとスケールが確認された(写真3)。経糸と緯糸の交差部分に染液が浸透していないことから、染色は製織後に行われたものと思われる。HPLC-PDAによる染料分析を行ったが黒色染料の同定はできなかった。媒染剤の試薬による反応試験をしたが鉄成分の反応は見られなかったため、複数の染料を重ね染めて黒く染めたものと考えられた。

道中着には黒い立衿が施された作例が多く、その材質には、毛、麻、木綿などが見られたが、毛織物はなかでも防水や防寒などの実用性も兼ね備えた上質なものといえる。この毛織物は「羅紗」という名称で知られる⁽²⁷⁾(図2)。『和漢三才図絵(1713)』には「羅紗ハ阿蘭陀ヨリ来レル毛織ノ上品ナリ。紅黒青白褐ノ数色有リ⁽²⁸⁾。」とあるように羅紗は舶載毛織物で、一部の武家の陣羽織や火消装束のほか羽織などに用いられた。日本で毛織物生産が本格的に開始されたのは明治時代に入ってからであるため、本資料の衿の黒羅紗も少量とはいえ国産の可能性は極めて低い。葛布地道中着の立衿部分と加飾に少量の舶載羅紗布を用いた点に、所用者の粋な審美性が窺えた。

3.4 留め具

留め具は前身頃の左右に見られた(図2)。円形の黒羅紗の縁を平絹地の笹縁で縁取り組紐を飾縫いしたものが、左右身頃各3箇所、合計6箇所に用いられていた。芯として和紙が用いられていた。黒羅紗は衿と同裂であった。

笹縁は幅2 cmほどの紐状の茶絹地で、三つ折りにして円形の縁にパイピングされていた。このような処理は陣羽織や火消し装束、武具甲冑に見られる。経糸、緯糸共に絹糸で、無撚りの生糸と見られた。経糸は1 cm 間に約40本、緯糸は1 cm 間に15越程度で、緯糸は経糸の二倍程度の太さであった。SEMで観察した結果も絹と同定された(写真4、5)。鉄媒染が原因と見られる劣化が激しかったため、試薬反応試験を行ったところ鉄成分の反応が見られた。HPLC-PDAによる染料分析を行ったが茶色染料の同定をできなかった。葛布の経糸、緯糸から検出されたピークと同様のピークが検出されたことか

ら、同種の染料の使用が推察された。

衿元2箇所には施された黒蝙蝠型鞋は、水牛の角を蝙蝠型に彫塑したものとみられた。鞋の背面には留め紐を通すための穴が彫り抜かれ、留め紐を通してと黒羅紗製の留め具台布につけられていた。紐は緑味を帯びた藍色の絹製組紐で、16条唐打で柔らかく組まれていた。紐はまた前衿の結び留めにも用いられていたが、特に鞋に通された部分などの劣化が激しく、左衿元の鞋は紐が裂けたために欠落していた。

留め具には立衿と同じく舶載毛織物が用いられており、蝙蝠型鞋に施された細工、組紐の綴じ方、絹製笹縁の使用など精緻な工芸技術が集約されていた。

3.7 縫い糸と縫製

縫い糸は藍色の麻糸であった。青色は染料分析の結果より、藍であると同定した。糸はS撚り単糸2本をZ方向にあわせたものであった。単糸は撚りつなぎがなされており、繊維の側面形状から大麻あるいは苧麻と考えられた(写真5)。糸の内側まで染料が浸透していないことから糸によりあわせた後に染色したものと考えられた。

身頃の背や脇、袖などは並縫いで縫製されており、縫い目は1目が約5mmから8mmと比較的大きな針目であった。

4. 素材と製作技術の再現

作品調査の結果をもとに、道中着に用いられた素材である身頃生地、衿生地、笹縁、留め具、留め紐を復元する過程で、各技術保持者とともに製作技術を検討し、復元を行い、その製作過程を記録した。

4.1 身頃生地

葛布の製作は、『製葛録』などに記録された江戸時代後期の技法に倣って行う方針で、静岡県島田市の村井龍彦氏、村井良子氏に依頼した。経糸には和綿を用いた。静岡県磐田市の寺田智彦氏が栽培する和綿の打ち綿を用い、綿紡ぎは佐藤千鶴子氏に依頼された。糸は20番手の太さのS撚り単糸を製作した。今回はインド製チャルカで製作された糸を用いたが、江戸時代後期の和綿の手紡ぎは糸車か紡錘でされた可能性が高いことから、今後、糸車や紡錘による和綿の糸紡技術について調査研究し復元および保存継承する必要がある。出来上がった経糸は、前処理として毛羽立ちを防ぎ強度を増すために葛粉で糊づけされた。経糸の通し幅は38cmとし、箄密度を1cm間に約11本、整経長を8.5mとした。緯糸に用いた葛は、7月に葛蔓を刈り、茹でる、醗酵、芯抜き、苧晒し、洗い、乾燥をへて葛繊維を抽出し、葛苧を裂き、糸端を結び繋げてつくりを作成した(葛糸製作の詳細は拙稿【注6】にある。)(図3、図4)

『製葛録』の挿図⁽²⁹⁾にあるように江戸時代後期の掛川での葛布製作は高機で行われていたようなので、製織は高機で行った。経糸の整経方法に関する記録資料は特に残されていないため、現在、村井氏

が行っている環状整経法を用い、粗箴を用いて経糸が機をかけた。江戸時代後期の綜統は糸製、箴は竹製であったが、今回はステンレス製の綜統と箴を用いた。製織前につぐりは水で湿らされ、舟底型の枠に入れ中央の糸目から糸端が出されることにより、葛糸が振れずに平らな状態で織込まれた（図6）。染色では、琉球藍に加え、タンニンを含む矢車玉、カテキウなどを用い、鉄媒染を行った。科学分析の結果からタンニン系の染料を特定することができなかった。技法史の観点からは山桃の樹皮⁽³⁰⁾が使用されたのではないかと推察したものの、分析結果と一致せず、『製葛録』には染色に関する記録はなかったため、今回の染色法は想像の域をでない。仕上げは、『製葛録』の挿図⁽³¹⁾にあるような毛羽取り、糊がけ、砧打ちを行った（図7）。

4.2 衿生地

衿生地の羅紗は、江戸時代後期頃にヨーロッパから舶載された商品であり、産業革命後に量産されたものと推察された。従ってこれを敢えて手仕事で再現する必要は無いと考え、イギリスで伝統的な羅紗布を生産している Hainsworth 社の以下に示す製品を用いた。

商品名：Melton ME 30 L

色：White

材質：100% Wool

織幅：142/145 cm

重量：495/525 grms/in., 355 g/m²

染色では、黒色は複数の染料を重ね染めしたものであったことから、合成染料であるイルガラン染料を用い、色味をあわせて染色した。

4.3 笹縁

笹縁は甲冑などに用いられてきた他、陣羽織や火消し装束に見られる。幅の狭い紐状である笹縁の製作は今日ではほとんどみられず、その製作技術を伝承している技術者を探すことはできなかった。織物研究家の幅晴江氏に依頼し、経糸 40 本、緯糸 1 cm 間に 15 越、幅 2 cm の平組織の笹縁を居坐り機で製作した。糸は愛媛県宇和島町で養蚕された生繭を染織家の二宮よしえ氏が座繰りで挽いた生糸を用いた。笹縁は鉄媒染がなされたものであったが染料を特定できなかったため、合成染料のイルガラン染料を用いて筆者が染色を行った。染色後に砧打ちを行った。

4.4 留め具

蝙蝠型鞋の製作は、甲冑師という職業柄、様々な工芸技術に精通している西岡文夫氏に依頼した。水牛角を材料として蝙蝠型鞋と、受け緒につける二つ穴の留め具が製作された（図8、9）。

4.5 留め紐

留め紐の製作は組紐研究者である西岡千鶴氏に依頼した。絹糸は多摩シルクライフ 21 研究会が製作

した青熟交配種の生繭を手挽きした座繰り糸を使用した。染色には藍と黄系の合成染料が用いられた。江戸時代後期の組紐であるということから、組紐製作には組台が用いられ、16条唐打で組紐製作が行われた(図11、12)。

4.6 縫い糸

縫い糸である麻糸の再現は大麻の原料から筆者が行った。細く裂いた大麻の繊維を糸単糸の太さに細く裂き、S方向に撚りをかけた。撚りは1cm間に約15回を目安にした。単糸二本を合糸してZ方向に撚りあわせた。染色は琉球藍で行った。

5. 製作過程の記録

各製作過程を動画と静止画で記録を行った(図3~11)。今回は筆者が定期的に技術保持者を訪問して記録を行った。全工程を効率的に記録するためには、今後技術保持者らに協力を要請し、製作過程を記録していただくことも視野に入れて考えたい。

6. 伝統工芸技術の保存伝承への取り組み

「葛布地道中着」一領は、葛布だけでなく綿糸、絹織物、毛織物、組紐、鞆など多様な素材で構成されたもので、江戸時代後期の葛苧製作、織物、染色、養蚕、綿栽培、組紐、彫物、仕立てなど様々な工芸技術が駆使されていた。江戸時代後期の職人の工芸技術を再現することは、原料の選別および入手から仕上げまで予想以上の困難が伴った。しかしながら各技術保持者との協議や製作過程の記録を通じて、現時点で再現可能な技術や道具と、再現や入手することが不可能なものを明らかにした上で、復元に取り組むことができた。本研究を実施するにあたり、2008年度に静岡、唐津地方で聞き取り調査を行ったため、以下にまとめて記し若干の考察を加える。

九州地方の葛布製作は冒頭で述べた通りすでに消滅していた。1970年代に佐志葛布を復元した松尾氏は染織家としての活動において葛布製作品を発表されてはいるが、製作技術の保存継承はなされていなかった。

静岡県では葛布の製作技術が継承されていたが、20世紀半ばまで生産されていたような細く幅が均一な葛糸を製作する技術者はいなくなっていた。また糸作りに携わる人口の急激な減少により昭和時代の壁紙地や襖地を量産するような規模の葛布製作は行われていない。村井氏らは先代が昭和時代に壁紙地や襖地を主流に葛布を量産したのに対し、着尺地や帯地などを中心とした商品の製作に切り替えていた。様々な問題を抱えながらも若手の製織技術者の育成など次世代に葛布を継承しようとする意欲的な姿勢が見られ、過去の製作技術の復元的研究やワークショップの開催など教育普及活動も積極的に行われていた。

葛布の経糸に用いられる木綿糸の原料となる和綿栽培は、葛布と同様にかつて遠州地方でさかんであっ

た。静岡県磐田市の寺田農園では和綿栽培が行われ、栽培から糸作りまでをワークショップを通じて広く紹介するなどして、普及活動を積極的に行っていた。糸紡ぎに関しては、素材や用具の違いや、趣味から職業まで関わり方の違いはあるにしても国内各地で手紡ぎに取り組む技術者やグループが数多くあることがわかった。

このような技術者らと共に、歴史資料などの検証を踏まえた上で、和綿栽培、綿づくり、糸紡ぎ、製織、染色、仕上げという、繊維が一枚の布になるまでの製作技術を保存できるようなネットワークを形成し、伝統技術を再構築した上で記録および保存する可能性が示唆された。

絹糸作りに関しては、伝統的な製糸法を研究している企業、技術者、団体があり、宮坂製糸所⁽³²⁾、長野絹織製作研究所の志村明氏⁽³³⁾、多摩シルクライフ 21 研究会⁽³⁴⁾などが挙げられる。熱風乾燥された繭、機械製糸された絹糸、薬品処理された絹糸に対し、生繭から座繰りで挽かれた絹の品質は明らかに高い。座繰り糸が染織文化財の復元⁽³⁵⁾や保存修復のための材料⁽³⁶⁾として活用され始めたことから、今後、伝統工芸技術が保存技術としての活用が期待されるとともに、伝統技術の再構築と記録および保存伝承が望まれる。

本稿で取り上げたような葛糸製造、和綿栽培、木綿糸紡ぎ、座繰りによる絹糸製作などは、素材に関する知識、卓越した手技、労力を要する貴重な工芸技術であるにも関わらず、その行為自体に製作者の創作性や芸術性を見出すことが難しいことから、その記録調査、保存伝承の重要性を見落とされがちである。本調査研究を通じて、糸製造のような伝統工芸技術を保存継承する取り組みとして、(1)原材料から糸作りを経て製品までに関わる技術を保存継承するためのネットワーク形成、(2)伝統工芸技術の現代社会における活用法の提案、(3)技術者らによる伝統工芸技術の社会普及活動、が考えられた。

(1) 原材料から糸作りを経て製品までに関わる技術を保存継承するためのネットワーク形成

「葛布地道中着」の研究を通じて、和綿、和綿糸、座繰りによる絹糸などが今日までかろうじて継承されている背景には、日本人の英知として伝統工芸技術が日本文化に根づいていることが挙げられ、地場産業や個人の製作活動に必要な糸素材として需要があることがわかった。和綿に関しては、先述したように原料栽培から織布の製作までの技術者のネットワークを形成し、技術に関する記録調査と保存継承を行いながら、活用することが今後考えられるだろう。文化庁では1975年（昭和50）の文化財保護法の改正によって選定保存技術の制度を設け「文化財の保存のために欠くことのできない伝統的な技術または技能で保存の措置を講ずる必要があるものを、文部大臣は選定保存技術として選定し、その保持者または保存団体を認定している。国は、選定保存技術の保護のために、自ら記録の作成や伝承者の養成等を行うとともに、保持者、保存団体等が行う技術の錬磨、伝承者養成等の事業に対し必要な援助を行っている⁽³⁷⁾。」現在、工芸技術の部で染織関連の選定技術としては琉球藍製造、粗苧製造、苧麻糸手積み、杼製作、手機製作などが認定されてきた。和綿や絹も製作技術の保存継承システムがある程度形成されれば、染織文化財を保存するための材料として活用されることも可能だろう。

(2) 伝統工芸技術の現代社会における活用法の提案

大学などの教育機関や産業界では、伝統工芸技術の現代社会における活用法が研究されてきた。京都工芸繊維大学では、伝統的染織技術に内在している人類の英知を先進的な材料の開発技術に応用することにより、安全性や堅牢性、柔軟性に富んだ環境適合型素材を開発する試みがなされてきた⁽³⁸⁾。多摩美術大学では、これまで利用されてこなかった繊維の活用法を研究開発し、布を生産する研究⁽³⁹⁾、⁽⁴⁰⁾が2001年より開始された。芭蕉布や葛布などを製作するための伝統工芸技術を調査研究した上で、熱帯地方で廃棄されているバナナの偽茎を再利用する技術を開発することで、伝統技術を先端的技術に展開し、地球環境問題や雇用拡大なども視野にいれたグローバルなプロジェクトに展開した⁽⁴¹⁾。このように伝統工芸の枠組みにとらわれない柔軟な発想と、現代社会や将来の継承者との接点を見出すことも、伝統工芸技術の存在を再認識する上で重要となるだろう。

(3) 技術者らによる伝統工芸技術の社会普及活動

筆者が復元的研究への協力を依頼した技術者らには、調査研究、勉強会、ワークショップなどを開催しながら、技術を秘蔵することなく普及させようとする積極的な姿勢が見られた。また葛布製作や和綿の手紡ぎなどのワークショップの受講者が日本各地から集まっていた事実は、日本の伝統染織技術に興味を持つ人々の層の厚さを物語る。今後の課題としては、特に伝統工芸技術との接点が乏しいと思われる大学生などの若手への教育と技術の普及活動が望まれる。また、技術保持者らが現代の消費者に受け入れられるようなもの作りを目指す中で「伝統技術に時代性を反映させたデザイン性を取り込んでいくこと」、「新しい伝統を創りあげていくこと」が重要な課題となるだろう。

おわりに

「葛布地道中着」に用いられた素材を調査し、得られた結果をもとに素材と製作技法を復元し、記録する取り組みを行った。幸いにも技術保持者らの協力を得て素材を復元することができた。伝統工芸技術の保存継承への取り組みについては、1つの製造システムを形成し維持してゆくことの重要性、伝統技術の現代における活用法の検討、今後の課題を提示することができた。産業界で染織技術が時代の先端テクノロジーを駆使して発展を遂げていく傍らで、手技を絶やすことなく今日まで継承し、時代の波を乗り越えながら次世代に保存伝承していこうとする人々に敬意を示すと共に協力しながら、日本人の英知から生まれた伝統工芸技術を絶やすことなく現代社会に反映させてゆきたい。

謝 辞

「葛布地道中着」を本研究にご提供くださった所蔵者、研究にご協力いただいた染織技術者、研究者の皆様、作品資料の閲覧をご許可くださった独立行政法人国立文化財機構九州国立博物館、太宰府市教育委員会、唐津市歴史民俗資料館、原始布・古代織参考館、本研究を実施するにあたり研究助成を賜った平成20年度ポーラ美術振興財団に深く感謝いたします。

《注》

- (1) 太宰府教育委員会蔵。2008年9月独立行政法人国立文化財機構九州国立博物館において調査を行った。
- (2) 川出幸吉商店 静岡県掛川市仁藤町7-3
- (3) 岡本葛布工房 静岡県掛川市下俣1025
- (4) 小崎葛布工芸 静岡県掛川市城下3-4
- (5) 大井川葛布(静岡壁紙工業株式会社) 静岡県島田市金谷河原1747 <http://www.kuzufu.com>
- (6) 深津裕子「染織工芸技術の変遷——葛布の製作技法と用途を事例として——」、『無形文化遺産研究報告第2号』、独立行政法人国立文化財機構東京文化財研究所、東京、pp.35-53(2008)。
- (7) 野間吉夫『佐志の葛布』私費出版、佐賀(1960)。
- (8) 後藤為義『西日本織物の民俗誌』葦書房、福岡、pp.49-77(1987)。
- (9) 2008年9月に実施した聞き取り調査による。
- (10) 文化庁文化財保護部『無形の民俗文化財記録第26集紡織習俗Ⅱ島根県・鹿児島県』財団法人国土地理協会、東京、pp.49-81(1981)。
- (11) 2007年12月に実施した聞き取り調査による。
- (12) 掛川手織葛布組合『葛著製造の手引き』、掛川手織葛布組合、静岡(1970)。
- (13) 「教草 第七 葛布一覧」、明治5年冬 鶴田清次、佐々木半十郎撰、明治8年、中島仰山画 鶴田清次校訂『教草』丹波修治著、溝口耕等画(明治5-9)、国立国会図書館蔵。
- (14) 大蔵永常『製葛録』(1815)、国立国会図書館蔵。
- (15) 独立行政法人国立文化財機構東京文化財研究所保存科学部、佐野千絵博士にSEMによる写真撮影(写真1~6)を委託した。
- (16) 共立女子大学家政学部被服学科被服管理研究室、齊藤昌子博士に分析を委託した。
- (17) 筆者がO-フェナントロリン法による鉄($\text{Fe}^{2+} + \text{Fe}^{3+}$)測定用の簡易水質検査キット(柴田科学株式会社製)を用いて実施した。
- (18) 材質の科学分析は実施しなかったので類推の域をでない。
- (19) 採寸法と仕立ての特徴に関しては、共立女子大学名誉教授の河村まち子先生、共立女子大学非常勤講師の田中淑江先生からご教示いただいた。
- (20) 大井川葛布所蔵。
- (21) 原始布・古代参考館所蔵。
- (22) 個人蔵。
- (23) 個人蔵。
- (24) 劣化して粉碎した葛糸0.1gを少量の精製水に浸し、試薬反応試験をしたところ鉄分の反応が見られた。
- (25) 注(15)の26丁裏には「織あげたる葛布の結び目をきざみとり艶つける」とある。注(6)のp.50。
- (26) 本稿では紙面の都合で分析データの掲載を割愛した。全ての分析結果は、平成20年度ポーラ美術振興財団に提出する研究助成報告書に掲載する。
- (27) 深津裕子『陣羽織の素材と技法に関する科学的分析と染織史的研究』共立女子大学大学院博士授与論文、博乙第14号、p.45(2008)。
- (28) 寺島良安『和漢三才図絵』、東洋文庫、東京、p.137(1985)。
- (29) 注(26)の25丁表。注(6)のp.49。
- (30) 吉岡幸雄『源氏物語の色辞典』紫紅社、京都、p.250(2008)。
- (31) 注(15)の26丁裏。
- (32) 長野県岡谷市東銀座二丁目13-28 代表 宮坂照彦 <http://www.lcv.ne.jp/~msilkpro/>
- (33) 長野県上伊那郡飯島町飯島197-8 <http://www.katsuyamaorimono.co.jp/company/index.html>
- (34) 東京都小金井市東町4-28-3 代表 小此木エツ子
- (35) 森克己「繭小石丸を用いた正倉院裂の復元模造」、『正倉院紀要第27号』宮内庁正倉院事務所、奈良、pp.1-44(2005)。
- (36) 石橋財団所蔵タペストリーの保存修復では、欧米に先駆けて生繭を座繰りで挽いた糸を用いた補修用絹糸が開発され、絹糸製作を志村明氏が担当した(タピスリー保存研究プロジェクト実行委員会『タペストリーの保存研究——石橋財団所蔵ヨセフ物語——』石井美恵、深津裕子編、中央公論美術出版、東京、2008)。志村氏の製作した絹布は、独立法人国立文化財機構東京国立博物館が所蔵するインド産経緯緞パトラのサリー

- (TI-167) の補修用絹布として用いられた他、日本の服飾の修復にも活用されている。
- (37) <http://www.bunka.go.jp/bunkazai/shoukai/gijutsu/index.html>。
- (38) http://www.kit.ac.jp/03/03_031900.html
- (39) 橋本京子、弥永保子、柏木弘、川井由夏、福岡（深津）裕子「バナナ・テキスタイル・プロジェクト——熱帯地方で廃棄されているバナナの皮を再利用するシステムの構築をめざして」、『多摩美術大学紀要第17号』、pp. 155-162（2003）。
- (40) 橋本京子、川井由夏、福岡（深津）裕子、長沢桂一、樋口明久「バナナ・テキスタイル・プロジェクト 2004 年度報告書」、『多摩美術大学紀要第20号』、pp. 171-185（2006）。
- (41) 多摩美術大学、文部科学省平成18年度現代的教育ニーズ取組支援プログラム選定事業「バナナ・テキスタイル・プロジェクト——地球環境問題とデザイン教育——」。

伝統工芸技術の記録と保存



図1 「葛布地道中着」江戸時代後期 個人蔵



図2 「葛布地道中着」衿部分



図3 葛蔓刈り 村井龍彦氏



図4 葛苧洗い 村井龍彦氏



図5 葛布の製織 下平洋子氏



図6 復元された葛布地



図7 蝙蝠型鞋の製作 西岡文夫氏



図8 復元された蝙蝠型鞋



図9 留め具製作に用いる組紐用絹糸



図10 組紐の製作 西岡千鶴氏



図11 復元された組紐

[Summary]

Documentation and Preservation of Traditional Textile Techniques

A Case Study of a Reproductive Approach to Materials Applied for a Travel Coat Made of *Kudzu* Cloth from the Nineteenth Century Japan

FUKATSU Yuko

This paper presents a case study of a reproductive approach to materials used for a travel coat made of *kudzu* cloth in the nineteenth century Japan in order to deal with documentation and preservation of traditional craft techniques. In addition to *kudzu* cloth, this coat consists of various materials such as imported black woolen cloth for the collar, silk braided cords for loops, water buffalo's horn for hooks and hemp for sewing threads. Firstly, in order to clarify characteristic features of styles, materials and manufacturing techniques, examination of the object was carried out including scientific analysis such as fiber examination, dye analysis and chemical tests. Methods of reproducing materials and techniques applied for the travel coat were discussed in collaboration with holders of traditional craft techniques on the basis of results of object examination. Then, materials were reproduced by craftsmen of respective fields, and each process was recorded as photographs and video tapes. This study provided a network among scholars, material suppliers, craftsmen and scientists. As a result of interviews to holders of traditional craft techniques, it was found that shortage of raw materials, consumers and successors are some of the issues facing them. It was also found that manufacturing techniques for Japanese traditional cotton, *kudzu* and silk yarns as well as sewing techniques should be preserved for the next generation, and that they can be applied as conservation techniques for cultural properties.

Research and Reports on Intangible Cultural Heritage
Number 3
2009

Publisher:

National Research Institute for Cultural Properties, Tokyo
13-43 Ueno Park, Taito-ku, Tokyo, 110-8713, Japan

無形文化遺産研究報告 第3号

平成21年3月27日印刷

平成21年3月31日発行

編 集 独立行政法人 国立文化財機構
東京文化財研究所
『無形文化遺産研究報告』編集委員会

編集委員 無形文化遺産部 部長 宮田 繁 幸
無形文化財研究室長 高 桑 いづみ
音声・映像記録研究室長 飯 島 満
共立女子大学家政学部教授 長 崎 巖

発 行 独立行政法人 国立文化財機構
東京文化財研究所

〒110-8713 東京都台東区上野公園 13-43
電話 03 (3823) 2241

© 独立行政法人国立文化財機構
東京文化財研究所 2009

National Research Institute for
Cultural Properties, Tokyo